

時代小説
自選集
第十一卷

乞食大将 桜子

大佛次郎

大佛次郎時代小説自選集 第十一卷

乞食大将・桜子

昭和四十五年七月十五日 第一刷

定価 八〇〇円

著者 大佛次郎

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

郵便番号 一〇四 東京都中央区銀座三の二の一

五三〇 大阪市北区野崎町七七

八〇二 北九州市小倉区明和町一の二

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

目次

乞食大将……………三

桜子……………一三五

装丁・題簽
見返し繪
佐多芳郎
中村岳陵

乞
食
大
將

槍

手負いとなり戦場に置き去りに、氣を失っていた若い武士があった。

正月のことだったので、日が暮れかけて寒くなって来たのと傷が痛んだせいで我れに復って目をあけた。目の前の山の尾根に光沢のない冬の入日が色だけ朱色に沈もうとしているのを、まだ、はつきりとした意識はなく見まもって、驚く心が急に湧いて来たように、目ばかり大きく見ひらいて行つた。

そこは崖がけの下の笹の繁つた斜面だった。少し前まで、戦闘はこの崖の上の狭い道路を挟んで行われたので、まだ、そこで人の声がしていた。これは敵方の者である。

山に挟まれている谷の入口の方角にも、遠く多勢の人間のどよめきが聞えていた。夕霧の湧いて来た山に、勝どきの声が轟とどろいた。その人数は高声に話しながら、こちらへ引揚げて来る。小笹の中に横たわっていた手負いの武士は、これは崖の上から覗き込まれたら見つけれられるのだと気がついて、もとのまま身動きもしないでいた。

この場合、悪いことには、この若者は黒色の立派な鎧よろいを着込んでいた。崖から落ちた時も放さなかったと見え、長柄の槍を手に

つかんだままでいた。もっと暗くなっていれば、崖の上から覗き込まれても見つかるまいが、日が沈んだばかりのところだったので、危険なことだった。若者は、敵の話し声が近くなってきたのを聞いていたが、不意と目を大きく開いて、そのまま閉じずにいることにした。

大胆なことだが、こうしている方が、敵のすることが見えて、いざと云う場合にも都合が好い。また目を剝むいたまま死んでいる人間があつたところで、決して珍しくないのである。頭の上の崖からは、何の木か枯れた枝をひろげていて、その一本の枝の股に、敵か味方か、腹巻をつけた雑兵の死体がつ、腰を折り手足を垂れて落ちずに振下っていた。はめている手甲が黄ろい布か革で、あたりが蕭条とした枯木立の山のせいとか、変に派手な色に見える。風の加減かゆらゆら、これが揺れているように見える。

崖の上を引揚げて行く敵の姿は枯草の上に、ちらと見えたり隠れたりした。戦に勝って帰るのだから、話し声が大きい。谷を覗き込んで、髯面ひげづらを見せて、音を高く唾をして行つた者もあった。

仰向けに小笹の中に横たわったまま、若者は剛胆に目をあいて、それを見ている。話声や足音だけとなり人が隠れると、山の上にひろがっている夕空の色が見えた。これは日のある位置に近い部分はまだ光で白く濁っているが、それを離れて東に寄るほど青い色が濃く、冷たく澄み渡っている。その透明に青い中に星が一つ嵌め込んであるのを若者は認めた。ちかちかと、見ている間に、その、何ともいえぬ白い光が、次第に明るく煌きらめき出して来

るのである。

星は、目を刺すようにきれいに光っていた。きれい過ぎて気になるくらいである。それから空が深く青い。沈んだ美しい色をたたえて、この上なく静かな冬の夕空である。

暗くなつてから敵の眼をくぐつて味方の陣地へ帰る。これは極り切つたことで、若者が身動きもしないで横たわつたまま一心に考えているのは、別のことだった。

（そうだ、今夜、夜討を掛ければ、必ず、敵を存分にひっかき廻せるぞ）

血まみれに成っている顔に、若い眼が急にいきいきと輝いた。

「これだけ味方がひどくやられたのだと、奴ら、もう、これで今日は済んだと考え込んで気を抜いている。そこへ突込むのだ。是非、そうしなければならぬ。あいつ等の、のんきな話を聞いて見る」

気を失つてから、一体どのくらい、時が経つたのか？ 背後に伏兵を受けた上に、正面からは木戸を開いて押出して来た敵が、一団となつて殺到して来た勢いは、まったく面も向けられぬ凄じいもので、踏み止っていた自分もいつの間にか揉み込まれ、泳がせられて、左右からの槍に突立てられ、最早これまでと観念して敵の軀（からだ）と重なり合つて揉んでいる間に、深傷に氣を失つたのか、また足を踏み外して崖を墜ちて失神したのか、ともあれ齒が立たぬような憂目を見せられた。

「あいつ等が！」

騒々しく笑つて誰れか崖の上を通つて行く。数人の足音である。傷の痛みに若者は危く呻くところだった。

どこと、どこをやられたのか？

動けるか？

立てるか？

動いては敵に発見されることでまたそれを確かめる自由はない。

傷は燃えるように痛み出したがそれと一緒に凝（こ）じている軀が焼け出したように、心を追立てて来たのが、そのことである。再び起つてあの凄じい敵に戦を挑むことである。

「今夜だ！」

この城井谷の宇都宮の一族、鎌倉に頼朝がいた頃から十八代、この土地に根を据えた家柄で、峻（きび）な要害を恃んで、一步も降ろうとはせぬのを、味方は繰返して攻め掛けてはその度毎に幾度も苦い目を見て追落される小癪（しょうさく）さ！ それを叩き潰（つぶ）す。微塵に、ひっかき廻して見せる、今夜だ。今夜を除いてその機会は、また何時、つかみ得るか？

「俺は一体、起てるのか？」

身（み）にえぐり込むような問いである。また、それには何とも返答が出来なかった。若者は蒼茫（そうぼう）と暮れて来る空を身動きもせずに見詰めているだけだったが、色のない唇（くちびる）から呟（つぶや）いた。

「何と云つても、これが戦の面白いところだ、やりたい。やつて見たい。軀は動かんでも、何とか……」

出血が夥しかったせいで、うとうと夢を見ているような心持でいたが、気がついて見ると、溪谷は闇にとぎされて、山に挟まれた空は星を一面に鑲めてあった。

若者はそれまで忘れていたことを急に思い出したように、

「そうか」

と、口走って小笹の中に起きなおった。

星あかりか、杖に突いた槍の穂に白い光が水のように走った。

苦痛をこらえながら、若者は崖の上の道路の様子を偵つて置いて、静かに歩き出した。

夜の谷は、寂寞としたものだった。

「動けるぞ。いや、どうしても、今夜の内にこなおして来なけりやならぬ」

足もとに、蹶くぐらいに敵味方の戦死体が転がっていた。しかし、黒々とした山は静かだ。これは、敵がまったたく、防備を怠っていると云うことなのだ。この事実には、衰えている氣力を振り立たせて、一念太く、若者は取りついていた。

「やるのだ！ 是が非でもそうせんけりやならぬ。時をおいて直すのでは、昼間のことを繰返すだけだ」

笹に滑って、足を取られて仰向に転がったが、唇を噛んで、痛みに耐え、また、槍を杖にして身を起した。その後の努力は、まったく人間ばなれがしていた。鎧を着た重い軀を搬んで、足場の悪い斜面を敷を潜り、茨を分けて、徐々に谷の出口の方へ歩いて出て来た。そうしている間にも、夕方まで彼我が闊った崖の上の

道には、赤く松明を燃やして坂を登って行く人間があった。これは道路に出るのはまだ危険だと云うことなのである。

若者は、それを見て、行く方角を決めているのである。

半刻ばかり経ってから、山間の小さい部落のあった平地に出た。部落の家と云う家は、敵が火を放って焼き払ったので、焼け跡に、燃え残った柱が、不揃いに骨のように立っているばかりである。いるかと思われた敵は、そこにはいなかった。遅く山の上に出て来た月が片側に光を投げて、そのあたりにも残っている死屍を見せた。その少し先の道端に、納屋らしい小屋が、なかば焼落ちて屋根を地に伏せていた。

その前を通り過ぎようとしかけてから、若者の足は、はたと停った。杖にしていた槍を倒して、緩慢な動作で位取りながら、敵と思われた人影を凝と睨み据えて立ち止まった。

火花の出そうな強い目の色だったが、思いがけず、穏かな声がかから押上って来た。

「何じゃ？」

その言葉とともに、若者は槍を起して抱くようにして、再び杖にして身を支えた。崩れ落ちていた屋根の蔭にいた人間は、犬のように呻きながら、おろおろして出て来た。

「旦那さまか。旦那さまか」

「馬藏」

と、若者は、声を荒く叱りつけた。

「何を吠える！」

「御無事で御座って、御無事で……」

「吠えおるわ」

と、若者は、苦笑いして、きつと、別の方角へ目を向けたが、
「そう、たやすくは命までは失くならぬものと見ゆる。が……人が見えるぞ」

下僕は、そう言われてから、川下の方角から近寄って来る松明の火を見て、遽かに、はっとしたらしく狼狽えて、

「敵で御座ります。誰れも彼も」

「見られてはならぬ」

こう云い棄てて若者は自分から、近い山の裾にある杉の林の方へ、不自由な軀で歩き出しながら、落着いた声であった。

「おれの首を拾うつもりで、出て来おったか」

後を追って来た下僕は、恐怖のあまり返事もなかった。おろおろとして走って主より先にしようとしている。平然と口をきいているのは、主の若者だけである。これは、松明をかざして来る敵が、まだ声の聞えぬ距離にいと確信しているのである。

「えらい目に遭うたなあ」

「……………」

「肩に大きく風窓をあけられた。骨に風があたっておるわ。そんなことは知らんで、気を失って、のうのうと寝ておった！」

はは……と低く笑って、

「が、結構、生きておる。動ける」

「お声が……」

「雑兵めらじゃ。俺の槍を、まともに受ける根性もあれば見上げたものぞ。敵の大將宇都宮、中務少輔とあらば、ここは滅多に背は見せられぬ。手負いの負目はあっても、武士の冥加に、必ず出て槍はつけるぞ」

中務少輔鎮房は城井谷の城主、身の丈六尺あまりの魁偉な体格に恵まれている上に臂力絶倫と知られた。――

松明の群は道路に現れた。焼跡に月光の烟っている場所を、火の子をあたりに散らしながら現れて、話声も一々こちらに聞き取れた。

「今日のような日に、男のお子なれば……二倍三倍に目出度いのじゃが……」

「いや、慾を申すな。女のお子じゃとて、これは目出度い」

鎮房と見える巨人は見当らぬ。隠れていた若者は、こう見とどけた。その後、この話を聞いて、聴耳を立てた。

昼間、城井谷へ攻め掛けて逆に手きびしく追落された黒田長政の軍勢は、ずっと後方の平地に退いてから混乱を取拾して陣を立て直している内に夜と成った。

この苦い経験は初めてのものではない。幾度か攻め込んで失敗を繰返して来たが、城井谷に拠る宇都宮勢は、要害に成っている谷を出て平地で闘えば不利の戦と成るので決して長追いはして来ない。それだけに攻めるのにも厄介な敵なのだが、黒田勢も平地

に後退すれば、傷兵を手あてして、疲労を休めることが出来た。陣を布いている小さい村の入口には、篝火を焚いて歩哨を配置し、軍の主力は民家に分散して休息を取らせるようにした。

それにしても今度こそは攻落して見せると意気込んで掛っただけに、その日の敗北は暗澹としたものだった。所々に焚火が燃え出して、家の荒壁や立木の下枝が赤く照らし出されるように成ってからも、手負の者が苦痛に呻き、無事で引揚げて来た兵も話す気力もなく疲労して、地に腰をおろしたまま動かずにいた。

引揚げに遅れた味方が、その間にも三々五々と村道を戻って来るのが見えるが、道端の空地や軒下に腰をおろしている者は、茫漠とした目を放って、他人事のように無気力に見送っているだけである。味方が受けた損害がどの程度のものか、まだ判っていない。とにかく、えらいことだった。これが、生き残った全部の人間の心を重くしている感銘なのである。そうしている間に、焚火の火の色だけを残して、あたりの闇は、とつぷりと深く濃く成って来ていた。まだ風の冷たい正月の夜なのである。

総大将の吉兵衛長政は、本陣に成っている民家へ入っていた。鎧も解かず炬端に大胡坐をかいて、まだ二十歳の血気の大將で、戦場に立つ毎に家来をおしのけて敵の前へ出ずにはいられない向い気の気性が、粗糲火で煙っている若い顔に、苦り切ったものとなって現れていて、附添っている部將たちが慰めようとしても受けぬのである。

やりおった、と、軽くは、長政は口を開けなかった。父親の如

水が、城井谷は遠巻きにして城方が弱るのを辛抱強く待つより手段はないといったのを、長政は強襲を掛けて一気に抜く計画だったのである。それが、今日の無慚な敗戦と成って現れた。利かぬ気の若者に、これは、まぎらし切れぬ打撃であった。黙りこくって不機嫌に、炬に燃える焰の踊を見ていると、部將の一人が土間で話している声が聞えた。

「うむ。……又兵衛どのを喃」

(又兵衛……)

と、きつと目を見上げて、話の様子から長政は事情を察して動かなかった。

又兵衛と云ったのは、後藤又兵衛基次であった。これが、引揚げて来た味方の中にいないと云うのである。

炬端にいる長政は、避けようとしていて、又兵衛基次の精神な顔附や、烈しい口のきき方を思いなへた。これは基次が臣下ながら、年齢が僅か向うが上の若者で、長政とは初陣以来、どの戦場へ出ても欠かさず肩を並べて闘って来た関係もある。いや、この場合には、もっと、なま新しい記憶があつて、その事件を長政は思い出して来たのである。

我れに復ったように、長政は、部將の一人に声を掛けた。

「又兵衛を、死なせてか」

答えた者も無造作であつた。

「その仕合せのようで御座る」

長政は、敗れて生き残るより討死した者の幸福を思つて、舌打

が出そうな感情であつた。むっとした顔附は、炬の火に向つて動かなかつた。手だけが動いて枯枝を取つては音を立ててへし折つて、焰の中へくべ初めた。

この城井谷攻めの最初の一戦に長政は今日よりも惨めに打破られて、姿もなく城に帰つてから父の如水に向けて面目なく^{もくどく}髻を切り、配下の者が皆これに倣つて一せいに引籠つたことがあつた。

父親も、その処置をよしとしたらしく、呼び出しもしないでいる。

ところが、長政の部下から唯一人だけ髻もおろさず、月代^{さかき}を剃つて、毎日平気で城へ出ていた男がある。これが余人ではなく又兵衛基次であつた。

城の者が長政に対する遠慮から、見兼ねてこれを詰つて、お手前も髻を払つて謹慎する方が為ではないかと意見した。すると、基次は、却つて何故そうせねばならぬか、と問い返す。意見した方は、啞然として、膝を詰め寄つて声高くい出した。

「若殿さま敗軍の責を負い、髻を払つて御引籠りあらせられ、下皆これに倣い慎みおるに、お手前のみ一向何気ないような態度歩き廻られるとは、世間が如何ように申すかじゃ」

基次は、これを聞きましたと、顔色も動かさずに言返した。

「負ける度に頭を剃り落しますか。負けることもあり勝つこともあるのが軍の定法。今負けたらば重ねて勝つように工夫致すが当然と思うが負ける毎に髪をおろしておつては髪の伸びる暇も一代

御座るまい。珍妙なことを承る。お互いに勝ち負けあつての戦、二度や三度の敗軍に一々氣を腐らせるようで、凡そ戦が出来るかどうかじゃ」

血氣の人間だけに声は高かつた。しかし基次が何も他人に異を立て、理窟で言い負かそうと氣負うていたのでないことは、純朴な態度に見えていた。基次は、心からそう信じているので、人に詰られて心外と思つたらしいのである。正直に頑固に、そうする方が当然と信じ切つていたので、長政だけでなく自分の朋輩とも離れて、一人だけ髻も落さず謹慎もしないで来たのである。

その心持が、平然と動揺なく顔に現われていたので、意見を出した方が、

「それは、如何にも左様かも知れぬが……」

と云つたまま、言葉の継穂がなくなつて拙いこととなつた。

長政の父親が、その話を奥で聞いていて、

「小僧が！」

と、云つて苦笑いした。

長政以下には、遊んでおらんで出て来い、城井谷をどう攻めるかじゃ、と沙汰があつた。一同は初めて、敗戦の責任を除かれたわけなのである。

城井谷の攻略にも新しくかかることになり、長政の旗本には、以前どおり基次が加わつていた。それが重ねて今日の失敗となり基次は討死したらしいと話に出たのである。基次のような剛の者まで死なせたと云うのは、改めてこの日の戦がどんなものだった

かを、繰返して考えさせられることなのである。くべる粗朶を手
に失くして長政は、腕を組んで黙然と炉に坐っていた。結論はな
い。明日改めて強襲を掛ける。それだけは頭で決っていて、そう
云い出すのさえ腹が立つのである。

不意と、人の声がして門口から誰か土間へ入って来た。槍を
重く地に突く音を聞いて、長政は目を上げ、今の話の又兵衛基次
が、生きて顔に血を流して突立っているのを見た。

長政の方から声を掛けるだけの暇もなく、基次は一礼して、上
樞へ近寄って、腰をおろして、

「殿」

と鋭く呼んだ。基次の、血を流している顔には、明るい色が泛
び上っていた。何か胸の中に楽しいことがあって、それを云い出
すのに、もどかしくて舌にもつれているような工合であった。

「夜討をお掛けなされ。今夜こそ……。今夜の敵は油断を致して
おりますぞ。又兵衛が、確と、この目で見とどけてまいった。
是非、是非とも、左様になさらねばならぬ」

何を云う？ と啞然とした様子で、土間にいた部将たちは顔を
寄せた。

長政もまた、炉端から、光る眼で見据えていて、

「手負いが！ 何を……吐きく」

「いや。八幡！」

と基次は、明るく叫び返した。

「この機を逃すことは相成らぬ。追いかぶせて夜討を掛けば、

出城の一つや二つ、きつと明け方までに我がものと成る！」

若い目、鼻、口。その全部が、強力に、一歩も挫げまいとする
意志を示している。決断のない心の状態にいた長政から見れば、
これは、眩しいように感じられた。長政は、黙然としたまま加勢
を求めるように、土間に集っていた旗本の人々に視線を向けた。
それと見て、基次は、向きを変えて同じく、彼らを見た。

睨むようにして、その目は強いものだった。

「御決断。……今夜を見送っては、懲りずに、永代、同じことを
繰返すことになる。太兵衛どの、如何じゃ」

部下にこれから改めて押し出して行く戦意はないと見て、長政
は、笑って言葉を遮った。

「利かぬ気の奴が！……。汝、その深傷で動けるか」

「御下知次第じゃ」

と、更に強く、はね返って来た。

「大将が動けと仰せらるれば、又兵衛は、動く。いやこのお供は
きつと仕る。動くなど仰せられても、動いて見せ申す」

「剛情者……」

笑いそらそうとした笑いが、長政の顔から、ふいと消え去っ
た。昨年の十月の戦に敗れて面目なさに髻を払った折の、この基
次一人が身勝手に反抗するようにして平然と、武士の器量は一度
や二度の敗戦に狼狽えぬもの、負けるのも戦じやと囁くように云
ったと云う、——長政としては甚だ手痛かった記憶が、鈍い胃痛
のように胸に拡がって来ていた。

遽かに気難しく黙り込んだまま、長政は粗朶をつかみ寄せ、手荒く折っては火に投げ始めた。

基次は、返事を待っていたのだ。

「殿！」

「ならぬ」

と長政は答えた。

「明日、改めてのことにしよう。汝も、傷の手当せい」

「いや、明日では既に……」

「誰も疲れている。手負も多い……」

「あいや、それは！」

「去ね！」

基次には極端に不機嫌できびしかった長政は、土間にいる部将たちに、いたわるような瞳を向けた。あるいは彼らの同意を求めた、と言ってもよい穏やかな視線であった。

「この上の、無理はならぬてや」

基次は、瞳を放さず長政を見詰めていた。そのままで、ひき退る男ではなく、どこまでも喰い下って来ると云った見詰め方である。

冷淡にしているように見せて、長政が、激して来たのは、そのせいであった。これは自分の初陣以来、苦勞を共にして来たとはいえ家来なのだ。臣下がこう不躰に、不遜に主人を見る法はないと思うから、腹に据えかねて来るのである。長政もまた、二十歳の血氣の大将であった。

「無理と仰せられますが、勝つと目算動かぬ戦をば、お捨てなさるか。なるほど、味方は疲れておれど……」

「ええい、又兵衛……」

「いや」

と、烈しさは、一分と譲らなかつた。

「御下知一つで、動かぬものが動く。これが大将の御器量。先手は、手負いの又兵衛が仕る。……あたら軍の汐時を……、五体無事の面々を控えておつて……押切られい。大将の御覚悟一つあつて、人も動き申す」

「又兵衛、俺れに、器量なしというか」

「御器量あれば、たつて申す」

長政の面に、さつと朱が差した。これまでよりも、もっと強い言葉、陰悪な声が出るものと期待されて、土間にいた母里太兵衛が、

「又兵衛」

基次は姿勢も変えぬのである。これ以上の強弁は、無礼をかどに斬って捨てるといふ羽目さえ考えさせる不安なものがあつた。人が、それで動いたのである。

「無礼ぞ。又兵衛」

「断るまではない、俺れは今夜、これから死んで惜しうないと思うた。その代りには、戦をこちらのものにすると思うた」

「やあ、やあ、そりや明日のことではやろう。また大して派手に怪我をして来たものじゃ」

「今の内に傷を洗うておけ」

「よいわ、よいわ、去ぬるわ」

引立てられるように立ち上った。やはり槍を杖にしているの
で、そうせぬと歩くのにさえ困難らしいのが、

「その軀で」

と、思わず、不憫を覚えるとともに、負けじ魂に微笑をそそら
れた。

「歩けるか？」

「何の！」

と、基次は云い放った。

「人間が、まだ、くたばりはせぬ、生きておるのじゃ」

その姿が戸口から外へ出て行つたのを見て、取合わぬと見えて
いた長政の固く結んだ唇から、

「彼奴！」

と云う言葉が漏れた。主従の遠慮はなく、人間と人間とが我慢
の限まで行つて、初めて出るような性質の声であった。それを、
誰よりも先に、長政は自分から意識して、すぐと苦い笑いにまぎ
らした。

「根性骨よ」

その剎那に、土間にいた者たちに、或る衝動が渡った。人の注
意は戸口の外に向つた。そこで誰か馬から降りた気配があつた
が、平服の、小柄な男が無造作な調子で入つて来たのである。土
間にいた者が耳に留めた声は、人違いではなかった。この頬骨の

出た、太い眉だけが黒々とした中年の男は、長政の父親で、勘解
由孝高であつた。太閤の片腕と見られていたながら、太閤から「何
とも心を許し難し」と蔭で云われていた謀將で、中津の城の主で
ある。部将たちは、一せいに土間に膝を突いて迎えるのを、愛想
なくじろりと見廻してから、脚が不自由なので、かなり醜く跛足
を曳きながら、長政が空けた炉端に来て、小さく、きちつと坐つ
た。

くぼんで光る目は、即座に、長政に向つた。そのまま暫く物も
いわず、両手をひらいて、炉の火にかざしていたが、

「はは……えらく、また、しばんでおる喃」

長政が、弁明しようとする孝高は笑つて、かぶせるようにい
い出した。

「見た。見たよ。外の模様はな。が、本陣は別のことと思つて来
た。しっかりせい。通夜も、もう少しは陽気なもののようにじゃ。
戦に負けるものに負けっぷりがあつてな。これは見上げたと思ふ
のがあるさ。ははははは……酒でも出して振舞つてやりなさ
い。時に、誰が城井谷の絵図を持っている。ちよと、見せな」

中津の城ににいる人が、何を思い立つか急に馬を走らせて出て
来た。それだけで部将たちには、響くものがあるのだ。一人が絵
図をひろげると、孝高は膝の向きを変えてこれに向つて、老眼鏡
を掛けて覗き込んだ。

「うむ、神楽山というか？」

ひとり語のように聞えた。が、急に、槌を落すような調子で指

を、絵図の上のその地点に垂直に置くと、

「吉兵衛」

と、長政のことである。

「今夜の内に直出して行つて、この出丸だけ貰つておけ」

はっと、人が動いた。

「わけなからう。これほど、一同ががっかりするように負け戦の後には、敵にも油断があるものじゃ。やつて見るさ」

誰も、一語も発しなかった。絵図の上に孝高が立てた太い指は、そのまま暫く動かずにいて、この微妙な、圧しつけるような屋内の沈黙を凝集していたかの感じがある。厚い眼鏡越しに、孝高の瞳は絵図の上をなお窺うようにして、おのれが下した決断に確証を求めていた。頭上に在る梁の上を、こまかく鼠が走る音がした。人は、全部沈黙を支えていた。

「それで、よし」

と、孝高は言放った。これも、先ずおのれに納得を求めたといふような語気であつたが、顔を上げて長政を見た。

「どうじゃ？」

土間にいる部将たちの黙り込み方には、この瞬間が来るのを憚り怖れていたような趣がある。孝高のいうところは、実に、たつた今、後藤又兵衛が頑なに主張して主人に拒まれて立去つたばかりのところなのである。もとより偶然的の符合であらう。孝高が見せた態度は、又兵衛の意見を聞いて来たと云うべきものではない。

若い主人は、ここで前に確信を以て云い切つた言葉を一変させ

るか？ 父親に逆らつてそのまま押しとおすか？ その返答を、

人は瞬きもせずに見まもつて待っている、明らかに長政は、それを意識しているらしく目に映じた。憤怒と悲しみと交り合つたような顔附で父親の言葉を聞いた長政は、身を動かして、絵図を覗き込んだ。

無言のままである。ただ一つの真面目さに追い込まれたように、犯し難く真面目な表情がきびしいものと成り加わつて来るのである。

孝高は、絵図から指をひいてから、洒落な、好々爺であつた。

「そうせい！ たかが丘一つじゃ」

と、無造作に言い切つて

「が、城井谷を潰すかどうかのけじめは、此奴がつける。谷の出入り口をおさえているでなあ。貰うとけ。遠慮は要らぬ」

皺を深く笑つて、炉端に膝を乗せかけるようにした。

「冷える喃。春じゃと云うが……が、若えもんには葉じゃぞえ。

昼の負けつ振りが大分のもんのようにだから、暴れられて面白から。夜明けまで、まだ、どのくらいあろか。誰ぞ、外へ出て月を見てみい」

父親のその言葉をはね返したように、長政は、土間にいる者を、きつと見返つて言切つた。

「押して見しやう。触れて来い」

声に応じて全部の人間が立ち上り、動き始めた、長政の若々しい顔立には、癪が立つて見えた。が、決断がつくと、この大将